「徳川黎明会叢書」所収の古筆手鑑にある、連歌切について

岩下紀之

一

さまざまな手鑑に、連歌の切がおさめられ、従来それらについて調べてみたのであるが、今回は、「徳川黎明会叢書」所収の手鑑につき、まとめてみたい。影印本による作業であるから、連歌資料としての面のみ、あらあらの検討を加えるにすぎない。編者の解説に、多少なりとも附加できれば、幸いである。

『菟玖波集』の、室町時代の古写本は、多く素眼筆と極められている。そのうち、巻十四と、巻二十は、ほぼ完備した巻子本が現在まで伝わっており、横山重氏旧蔵本の巻十四は先年複製本も刊行されたのであった。本稿ではこの種類の素眼本を、旧蔵者名によって、横山本と呼ぶこととする。これとは異筆の、やや長い断簡が、やはり、素眼本と極められ、巻十七、巻十九の二巻が残っているが、こちらは書写年代も少し降るもののごとくである。

さて、「徳川黎明会叢書」中の古筆手鑑には、素眼と極められた『菟玖波集』切が二点ある。まず、『玉海』の340番の切は、左のように読みとれる。

「　　藤原長泰
江につなく舟にて雪のたまるらん
身をすてしより友はまたれす
十仏法師
かくれかのみ山の雪をひとりみて」

編者の解説に、これを『菟玖波集』の巻十二、雑連歌一であることを指摘している。事実、金子博士の『菟玖波集の研究』所収の、広島大学本『菟玖波集』にあたると、一二一〇の付句から一二一一の前句、付句の部分である。ここは巻十二の巻末の部分で、切の紙面左側は、四行分ほどが、余白になっており、巻末という位置から考えて、自然

である。本文を広島大本と比較すると、漢字のあて方を除き、異同はない。

この切を見ての印象は、横山本と大変よく似た筆跡ということである。影印本で見る限りでは、同筆と思われるのである。そこで、編者の解説と、横山本複製に付された金子博士の解説を比較してみると、両者とも斐紙であること。寸法は、この切のたて、24・6㎝、よこ、16・6㎝というのに対し、横山本はたて24・4㎝、よこは、巻子本で全長504・6㎝とのことである。また、日本古典大系『連歌集』の、伊地知鐵男氏解説によれば、横山本と、書陵部蔵の巻二十は、「ともに縦二四・五～六糎、横一六・三～五糎の斐紙薄様で、もとは冊子本であったのを巻子本に改装したものである」とのことである。横山本とこの切の用紙寸法はどうやら同じものと見られるのではないか。句の書式から見ても、特に矛盾は生じない。すなわち、一面を十行に書くことであるが、この切も余白分を含めると、そのように見える。前句を付句に対して、二字ほどさげて書くのも両者共通している。

「霜のふり葉」126番も、素眼法師と極められた、『菟玖波集』切である。

「
山もあさきや浮世なるらん
心までかへるましきは浮世にて
前大納言尊氏

身を奥山そなをふかくなる
栖人もあるかなきかのいほりにて
源高秀
世にかけろふの身こそあたなれ
浮世とや猶すみそめの袖　」

『菟玖波集』巻十六、雑連歌五（一五六四～一五六六）と解説されており、広島大本とは二個所異同[注]がある。こちらの「源高秀」に対し、「藤原高秀」、「浮世とや」に対して「浮世にや」となっている。なお横山本とは異筆と思われ、寸法も、解説によれば、たて22・8㎝とのことなので、別本であろう。

なお、「文車」34番は、素眼と極められた句集の切である。

「　彼国のをしへのあるしよも捨し
里にとは、やむさしの、道
うつし絵やまたみぬ方をしらすらん
都をよそにわかれゆく人
いのるおもひを神やうけなん
ことの葉の道も法にと歎く身に」

何らかの句集の切と思われるが、今のところ出典を見出していない。

なお、以上伝素眼筆の三点、それぞれ全く筆跡が異なる。

二

『新撰菟玖波集』には、実隆本をはじめ、室町時代の写本がかなり伝来しているが、この手鑑群にも二点の断片が伝わっている。

『文車』47番は次の通りである。連歌師宗牧と極められ、本文はこうである。

「

かすみけり雨は夜のまの朝日影
　我ふる里と鳥そさえつる
　　権大僧都心敬

たかうへし木すゑの野へにかすむらん
　めつらしと見るいまの一筆
　　宗祇法師

きのふまて雪をゑしまのあさ霞
　風そうきあたら桜の花のかけ」

右は『新撰菟玖波集』巻十三、二四四七から二四五二にあたる。実隆本と比較すると、本文の異同はない。

同じ『文庫』は38番は、冷泉為相と極め書があるが、内容が『新撰菟玖波集』であることから見て、解説者の説の通り、何らかの事情で位置が変わってしまったのであろう。本文は次の通り。

「　花のか、みや水にほふらむ
　　宗般法師

玉嶋や川かせゆるく梅さきて
　しら雲もはなもよし野のすかたにて
　　印孝法師

た、青柳やかつらきのはる
　花まてはゆかぬ山路にこよひねて
　　法橋専存　」

これも、巻十三の二四八四から二四八八にあたり、実隆本との異同はない。

ところで、この二つの切は大変よく似た筆跡で、同じ巻十三のツレであるように見えるが、解説では両者ともに斐紙で、紙質は合致するものの、寸法が異なっている。すなわち、38番は19・3×15・8㎝、47番は22・3×15・8㎝というのである。38番の天地が、何かの都合で切断されたものという可能性を想定しておきたい。

なお、金子博士『新撰菟玖波集の研究』に諸本の異同を論ぜられた表があるが、この二つの切の箇所は不一致の諸本はかかげられておらず、また実隆本と文字遣いをのぞいては異同もないので、諸本研究の上では問題点はない。ということは、室町古写のすぐれた一本の面影を伝える切であるということになるわけである。

三

宗祇は『新撰菟玖波集』より前に、『竹林抄』を編み、もって先輩

連歌師七人を顕彰したのであるが、『竹林抄』については、まだ包括的な研究がないようで、諸本の位置づけが充分に行なわれていない。ここでの二点を将来のために書きとめておきたい。

『藻叢』（人）21番は次の通り、

「　　智薀法師

かた岡のあしたの霞さむき日に
　にほひすくなくさけるはつはな

　　能阿法師

霞けり雨は夜のまの朝日かけ
　うらかおもてか衣ともなし

　　宗砌

しの、めのあしたの山のうす霞
　あた、かなれや春のさと人」

これは『竹林抄』巻一、一二から一七である。一応続類従本活字本と照合してみると、異同はない。

もう一点、『玉海』353番を見ておきたい。

「　　法眼専順

かへるへき日もかきりなき旅にきて
　そら行雲のまよふ身はうし

　　賢盛

たか里も見えぬ高ねをこえわひて
　むかしの夢のおもかけもうし

　　宗砌

あしたには雲ゐる峯の旅まくら
　かへりて見はや春のふるさと」

これは『竹林抄』巻七、一九二四から一九二九までである。これも同じく続類従本と照合すると、作者表記が、「法眼専順」というように、「法眼」なる僧位が表記されている箇所が異っている。

さて、この両者は、同筆と思われる。まず、極書に、同じく池田帯刀正能とするので、古筆鑑定家には、この切は周知であったのであろう。ちなみに、『藻叢』の切に付された極めには琴山の印、『玉海』のほうには牛庵の印が押されており、古筆家と畠山家の両家の鑑定が一致しているのである。また、池田帯刀正能なる人物は、『新撰菟玖波集』作者で、天理本作者部類には、「典廐内、池田帯刀允」とある。典廐は『尊卑分脈』によれば、細川政国（文明十七年出家）、政賢（永正八年死）のいずれかと思われ、この父子どちらかの代の被官であろう。池田正能の事跡として伝わるものは承知しないが、『竹林抄』の筆写をする人物としては、時代といい、連歌数奇といい、ふさわしい。古筆の伝承筆者は、もとより何ら真筆とする確証のないものであるが、それらしい人物を持って来ることが多く、ここもその一例とすべきであろう。

さらに、両者ともに一面九行書とすること、紙質が斐紙であるところ、共通点は多いけれども、料紙の寸法に相違がある。『藻叢』のほうが17・9×16・4なのに対して、『玉海』のほうは18・9×17・4

というのである。手鑑におさめる時などに、何かの事情でそうなったのか、今となっては確かめるすべもあるまい。

この『竹林抄』切の本文については、連歌そのものは異同がない。作者表記について、校訂資料としての意味があろう。『竹林抄』巻一は、続類従本によっても、作者七人が最初に一人ずつ並べられ、それぞれ、宗砌法師、平賢盛、権大僧都心敬というように、姓、または称号付きで表記される。『藻叢』の切は、この最初の部分の「智蘊法師」「能阿法師」というところを示しており、二順目に入ったところで、ただ「宗砌」と表記されている。『竹林抄』原型は、これが各巻で繰り返されたのではなかろうか。『玉海』のほうは、巻七の四十二句目からはじまるが、この巻での専順は、この句が初出なのであり、そのため「法眼専順」と表記されているようである。室町期の『竹林抄』写本として、これらは、無視できないものであろう。

四

『玉海』370番は、山崎宗鑑と極められた連歌切であるが、内容は明らかに『犬筑波集』断簡であり、筆跡も、複製本によるかぎり、天理本の『犬筑波集』に酷似している。

「　むかしの句に何とてかたてゆのからくなかるらん
　うめ水とてもすくもあらはや
　口なしに黄はのあるこそふしきなれ
　木幡のをちをわたるゐのし、
　小ちこにやからの心経をしふらん
　あちへむけんけこちへむけんけ
　いかにへのこのかなしかるらん
　ともにはやおやはうたる、舟いくさ
　きけは□地(但カ)こくのさたも銭なれや」

天理善本叢書所収『古俳諧集』の解説によれば、宗鑑の犬筑波切はかなりの数が存在するとのことであるから、この切もその一つに数えられよう。

さて、この切の伝える『犬筑波集』に最も似た段階のものは何か、ということになるが、現在の所、何も提案できるわけではない。ただ、公刊された諸本では、先の『古俳諧集』の所収の真如蔵本が最も近いと思われるのである。この切の、「うめ水……」の句が、同本の、二十九表に見え、「木幡の……」、「あちへむけんけ……」の句が二十九裏に見え、「ともにはや……」が三十四裏に、「きけは□……」の句は、二十九裏にある。すなわち、「ともにはや」の句のみが後におかれているが、他の句は、だいだい句順まで一致する状態なのである。真如蔵本が、諸本中、かなり網羅的に句を収集している本であることも一つの原因であるが、句順の共通性は見のがし得ないことでもあろう。古活字本も句数の多い本であるけれども、この切との共通句は、「きけは□……」の句一句のみで、しかも、付句がはたして、共通かどうかはわからないのである。

五

百韻千句の類の原本が伝えられるものは、たいして数が多いわけではない。手鑑に貼られた懐紙の断片は、興行当時の姿を、さながらに残している可能性があるから、特に七賢時代にさかのぼるものの貴重さは言うまでもない。ただ、いかにも片々たる断簡であって、興行年次も不明となると、何とも処理に困惑する。断片をおおよその時代ごとに収集し、一覧できるようにととのえた上で、他日を期したい。ここでは、七賢時代の作者が出座しているらしい切を一覧してみたい。

①『玉海』269番　十住心院心敬

「おしめなを後の
　やよひの春の空　順
日かすを花の
いのちともしれ　晟
かけろふのもゆると
　みゆる草の原　能」

②『玉海』271番　連歌師宗砌

「浦路のかたは
　鴈そなくなる
程とをし花か
雪かのこしの山
さくらにかへる
春のゆふかせ
音かすむ野寺の
鐘に日の入て
草のいほりは
　人かけもなし」

③『玉海』279番　連歌師寿慶

「飛火かくれの
　くらき明かた
蛍のみしけき
堀江は月もなし
あしやの浦の
五月雨の比
暮ぬるかよそに」

④『玉海』341番　蜷川新右衛門尉親当

「なかめをけ山こそ
　秋のかたみなれ　忍
わか身をうらに
すめるわひ人　当
よらむせもなみなら

ぬ世に袖ぬれて　砌
ふみしるほとの
こひちたになし　忍
ふかき夜にわかれし
のちの文もみす　当
かりかねかすみ
はなのちるころ　砌」

⑤『玉海』342番　杉原伊賀守賢盛
「親と子の中　今
くれ竹のすなほに
清きすゑとをみ　飛鳥井前中納言
たゝすをみれは
波のしらはし　能阿
声さはく鴨の
山陰ふる雪に　賢盛
柴とる人の
かへるゆふ暮　三条宰相中将」

⑥『玉海』364番　能阿弥
「川上の月の
うき雲立消て　頼宣
こゑよりあくる
霧のした水　宗怡
いつくにかよるの
をしかのわたるらむ　明心
みやこになれぬ
道そものうき　世縁
里もなき野原に
ひとりゆきくれて　祥盛
松をやとりと
かせはとひけり　宗江」

⑦『蓬左』117番　素眼法師
「我とても車をかく
る齢にて　救
致仕名やのこ
る覧　明」

⑧『蓬左』119番　十住心院心敬僧都
「ふね留よその名も
しるきみやこ嶋
うすき衣の
関のゆふ暮

夏の日のあつたの
神に詣来て
ちかくなるみの
里の人かけ

⑨『霜のふり葉』164番　惣持院法印行助

「もるゝかたなき
須磨のつくり絵　元説
夕日影かるゝ野
山を色とりて　盛長
うつろふとのみ
みゆるいつはり　心敬
いまさらにいひし
こと葉やかはるらん　元隆
まつ夜ふけぬと
かねそきこゆる　幸綱」

⑩『八雲』87　徹書記

「袖かけてにほへ
千草の花の露　順
けふつむ菊に
契り行すゑ　心
別つる庭は
まかきを形見にて　忍
とひかふ蝶も
春やしたはん　行
舞の名の鳥の
いりかたかすむ日に　砌
うたふや木かけ
梅かゝのこゑ　忍
友さそふなにはの
舟子さほとりて　心
ほさぬ田みの、　」

右の十点は、それぞれ七賢時代を偲ばせる資料で、連衆の名や、伝承筆者等が該当するものを翻刻してみたのである。出典を見出し得た切について論じてみよう。

まず、②とした切であるが、これは、享徳二年正月二十五日の宗砌独吟百韻の一裏十句目から十四句目である。国会図書館の連歌叢書所収古代連歌集と比較すると、文字のあてかたは異なるが本文としては全く同一である。連歌叢書は江戸末期の写本で、本文を考える時は割引いて考えられてきたが、ここではきわめて良質の本文を伝えている。また『玉海』の切の、宗砌筆とする極めも、本文が同じ宗砌の独吟百韻で、しかもどこにも宗砌の名が記されないのであるから、偶然の一

致とも思いにくく何かしら由緒ありげに思われる。

③の切は、文正二年正月元日の、宗祇独吟百韻、一表四句目から七句目前半までである。『宗祇の研究』に所収の太田武夫氏本と比較すると、これまた異同がない。

④は、永享十二年十月十五日の、宗砌、忍誓、親当の三吟百韻で、その一裏九句目から十四句目にあたる。これを静嘉堂文庫の連歌集書本と比較すると、ここでも異同がない。

この百韻は永享年間にさかのぼる、はなはだ初期の宗砌らの活躍を伝える貴重な作品で、ここに古写本を見ることができた。また、連歌集書がかなり良質の本文を伝えていることが立証されたのである。

⑩は、享徳二年三月十五日の、宗砌らの五吟百韻の二裏の一句目から八句目前半までである。この百韻は、宗砌、忍誓、行助、専順、心恵という、この時代最高の作者五人がそろった作品で、従来から諸本が知られていた。しかし、連歌集書等、いずれも江戸後期の写本である。この作品において、『心敬作品集』所収の天満宮文庫本と比較すると、かなりの異同がある。天満宮文庫本を示し、この切を対校しておこう。

袖かけて匂へ千種の花の露　順
けふつむ菊に契る行末　心
別つる庭は笹もかたみにて　忍
飛かふ蝶や春をしたはむ　行
舞の名の鳥の入かた霞日に　砌
うたふや木陰梅かえの声　忍
友さそふ難波の舟子さほとりて　心
ほさぬ田みの、嶋人の衣　砌

八句中の四句まで小異があり、この場合、天満宮文庫本は良質な写本とは言い得ないであろう。ただ切のほうの「忍」の句、「梅かゝ」というのは、いかがなものだろうか。おどり点でなく「え」と読むべきなのかもしれない。

以上、懐紙切については、かなりの数の出典を見出すことができ、あるいは後世の写本の転写の精度の判定が可能となったのである。全体を通して言えば、このような諸断片を、何らかの形で登録し、一々の切の出典、書写年代の検索を容易ならしめることがのぞましい。

注

福井久蔵『校本菟玖波集新釈』には、この切のような校異は記載されていない。